

水生生物の分布，生態調査 アユ冷水病実態調査

宮本 敦史

目 的

近年全国的に問題となっているアユの冷水病は、養殖場だけでなく河川等自然水域で斃死が発生するという点でこれまでの疾病とは違った対策が求められている。本調査では河川における冷水病発生要因と冷水病原菌の分布状況を把握することを目的に、放流アユ種苗自身の保菌検査と、河川に生息するアユをはじめとする魚類の保菌検査を行った。

方 法

1. 在来魚保菌実態調査

三重県内の河川に生息するアユについて、冷水病原菌 *Flavobacterium psychrophilum* の保菌状況を把握するため、県内の1河川において友釣りでもアユを採捕し、保菌検査を行った。また、河川内における冷水病原菌の残留の有無を把握するため、河川にアユが生息しない2月に在来魚を採捕し、保菌検査を行った。鰓または腎臓を検査部位とし、冷水病原菌の検出にはPCR法を用いた。検査方法の詳細はアユ冷水病対策研究会で定められた方法に従った。

2. 放流種苗保菌実態調査

県内河川へ放流されているアユ種苗の冷水病原菌保菌状況を明らかにするため、放流直前のアユ種苗について保菌検査を行った。県内の1漁協が放流する種苗のう

ち、湖産種苗2ロット、人工産種苗3ロット、海産種苗1ロット、河川への天然遡上アユ1ロットの計7ロットについて、放流直前に各60尾ずつ（天然遡上アユのみ20尾）を無作為抽出し、99%エチルアルコールで固定したものをPCR検査に供した。検査部位は鰓を用いた。また、昨年度多数確認された奇形魚の出現状況について観察した。

結 果

1. 河川生息在来魚冷水病原菌保菌状況調査

解禁前の5月に漁協が実施した試し釣りで採捕されたアユ25尾および解禁後の6月に友釣りで採捕されたアユ21尾の計46尾について検査を行ったところ、いずれも冷水病原菌は検出されなかった。また、2月に在来魚5種71尾（カワムツB型32尾、アブラハヤ8尾、ウグイ15尾、タカハヤ15尾、アマゴ1尾）を採捕し、検査を行ったところ、いずれも冷水病原菌は検出されなかった。一方、アユ漁解禁中に多くのアユが斃死して淵にたまたり、瀕死のアユが川を流れ下るなど、冷水病の発生が疑われる現象もみられた。

2. 放流種苗保菌実態調査

検査を行った7ロットのうち、琵琶湖産種苗2ロットで保菌魚を確認した。昨年度多数出現した下顎部の歪みなどの奇形魚はほとんどみられなかった。